

子類8箱分、栗原寄贈分の約70箱のうち原爆・被爆者関係の書籍・冊子類について、①各県・地域の被爆者の会が発行した手記・体験記、②文学・芸術、③被爆者調査・研究、④被爆者対策・運動史、など、おおまかな分別作業を行いました。

その後、目録をとるための分類・並べ替えや、日本被団協事務所と南浦和資料室、愛宕事務所でデータを共有できるネット環境の整備も整い、エクセルで目録を入力する作業のための体制、人員確保が課題となっています。

10月7日には、日本被団協の役員として新たに継承する会の担当となられた原明範さん（埼玉）、和田征子さん（神奈川）を交えて資料庫部会を開催。今後、各都道府県、地域の被爆者の会が発行してきた資料の現状を把握し、会が解散あるいは存続が危ぶまれているところを優先しながら現地とのつながりをつけていくこと、ブロック会議など各県代表が集まる機会に協力を要請する場を設けていただくこと、物故役員のご遺族に書籍類の寄贈をお願いすること、などを申し合わせました。10月18日に開催された日本被団協の全国都道府県代表者会議においても、原さんが資料収集の意義と現状を報告し、各県代表者のみなさんに今後の協力をお願いしました。

2. 広報電子化部会

9月19日に東京四ツ谷プラザエフで広報電子化部会の立ち上げに向けて岡山担当理事をはじめ4名が継承する会webサイト等を見て、電子媒体の現状を共有し意見交換を行った。9月末までに課題についてそれぞれ作業を進め、必要な場合は10月以降に広報電子化部会を開催することを決めました。

3. 継承交流部会

10月23日に日本被団協事務所で第1回継承交流部会を開催しました。

継承交流部会は、継承センター設立委員会の「ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産継承センター設立構想」にもとづき、センターの「継承・交流活動」の中身～被爆者と継承者とをつなぎ・学び合う諸活動の「場」となる、被爆者の歩み・運動を伝える～をつくっていくことが課題です。

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の吉田理事から①一人でも多くの被爆者の証言を残すこと、②なぜ原爆が使用されたのかを明らかにすること、③被爆者運動は何を訴え求めつづけてきたのかを学び合い知らせること、④継承者の養成の4つのテーマが提起されました。

①は「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク」がこれまで取り組んできた課題でもあります。今年、12月19日に開催する「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」以降、この課題はノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会の取り組みに合流していきます。また、日本被団協と協力しての被爆70年調査「被爆者として言い残したい

こと」もこの夏に始まり、調査票の回収中です。③の具体化として11月14日に被爆者運動に学び合う学習懇談会を企画しました。④については、広島市・国立市の伝承者育成事業をはじめ先行する取り組みに学びながら「継承」の意味を明確にし、イメージを広げることが提案されました。

II. 各地の取り組み・関連企画から

1. 【東京】10/17「被爆70年 広島・長崎は、なんだったのか？

～今を戦前にしないために～」を開催しました

10月17日（土）、日本被団協と実行委員会が主催する被爆70年のつどい「広島・長崎はなんだったのか？—今を戦前にしないために」が開催されました。継承する会もこの実行委員会に参加し、1月からの準備に携わってきました。

当日はあいにくの雨模様でしたが、全国から来られた被爆者をはじめ支援団体や市民、学生ら約700人が参加、会場の日比谷公会堂の1階席はほぼいっぱいになりました。

音楽劇「まほうのたね」で始まった第1部、パブロフの「茶色の朝」を原案とした劇からは、自分には関係ないと思っているうちに忍び寄ってくる戦争・ファシズムの怖さを感じさせられます。

メイン企画は、つどいのテーマ：「広島・長崎はなんだったのか—今を戦前にしないために」を考えるための、映像や音楽を交え、若者の疑問に答える形の対話劇。原爆が人間にどんな苦しみをもたらしたか—一家の下敷きになった母を救えなかった原爆地獄の体験を語った岩佐幹三さん（広島被爆）、被爆後今日まで家族全員を苦しめつづけて来た原爆後遺症とのたたかいを語った横山照子さん（長崎被爆）。国の戦争「受忍」政策を許さず、アメリカの「核の傘」のない青空と「戦争しない国」をとり戻したいと訴えた吉田一人さん、核兵器の非人道性にもとづく国際世論を築き上げてきた被爆者の運動を紹介し、いっそうの努力を誓った藤森俊希さん。4人の被爆者の証言は圧巻で、聴く者の胸を打ちました。被爆者たちが自ら立ち上がり、原爆被害を究明しながら要求をまとめ、国や世界を動かしてきた運動の歩みは、いま「民主主義って何だ？」を問い始めた若者たちに、それを体現しつづけてきた姿を示してくれました。

合唱団「この灯」のコーラスをはさみ、第2部は、空襲被害者や沖縄戦の関係者、さまざまな分野で継承活動にとりくむ若者ら10人のリレートーク。継承する会の関連では、被団協とともに実施している被爆70年調査について根本雅也さんが、また、吉村優子さんが長崎で被爆した祖父の考えに近づきたいと、被爆者の話を聞き、周囲の友人に話すようになってきた経験を語りました。

参加者からのメッセージには「何も知らず生きてきた自分が恥ずかしい。しかし、今知ることができて本当に良かった」（20代女性）という声も。

準備の過程を含め、若い世代の人たちや他の戦争被害者との協力が芽生えてきたことは

何よりの財産、今後のとり組みに活かしていきたいものです。

2. 【埼玉】被爆体験継承の取り組み

(被爆体験聞き書き行動実行委員会)

9月5日に平和ネットワーク草加と草加市の共催で「草加平和の日」のつどいが開催されました。例年は原爆のパネル展示と講演が主な活動内容でした。今年はしらさぎ会の土田和美さんが、国立市の被爆体験の次世代の語り部育成の取り組みに関心を持ち、草加市や平和ネットワーク草加の方々と話し合い、被爆者の問題や体験を語るつどいを初めて取り組みました。

田中熙己しらさぎ会会長から体験と「被爆者問題の現状」を、宮本一さんからご自身の体験を、土田和美さんの体験を当日参加できない土田さんに代わり被爆体験聞き書き行動実行委員会の青木より子さんが語りました。

被爆体験の継承ということでは、当会としては初めてのことです。会の活動や他のつどいなどを通して、青木さんは土田さんの体験を何度も聞いており、人となりもよく知っています。土田さんの体験なら話せると代役を引き受けました。原稿を見ながらでは語るということにはならないと考え、NHKの「被爆者からの手紙」に収録された土田さんの原稿を暗記して、当日は起立して、思いを込めて、一言一言はつきりと語りました。

後日、土田さんが平和ネットワーク草加の人に聞いたところ、会場の反応は好評であったということです。平和ネットワーク草加では、今回の企画を通して被爆体験を聞いていかなければという思いになり、10月16日の被爆体験聞き書き行動実行委員会に2人が参加してくれました。参加の感想として「いろいろな活動があることを知ったが、会に持ち帰って、今後活動にどう生かしていくか考えていく。」と発言していました。今後は国立市の語り部育成についてや、広島市の継承者の話を聞いてみたいということで、この秋のしらさぎ会の広島行にも参加されるそうです。

3. ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク

(1) 【東京】12/19「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」を開催します

12/19「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」に向けて10/11(日)10回目の打ち合わせが東京四ツ谷主婦会館プラザエフで開催されました。8名が参加して最終的な企画内容の確認を行いました。多くのみなさんの参加をお待ちしております。詳しくは同封のチラシをご参照ください。

【企画内容】

■ミニ映像作品上映「ヒロシマ・ナガサキから未来へ」

(ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク制作)

■開会挨拶 岩佐幹三さん

(ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会代表理事、日本被団協代表委員)

■全体企画 「ヒロシマ・ナガサキを伝えるということ」

(お話：川崎哲さん)

NGOピースボート共同代表。核兵器廃絶国際キャンペーン国際運営委員)

■被爆者の証言

(証言者 千葉県原爆被爆者友愛会の被爆者、聞き手 コープみらい組合員のお母さん)

■各地の取り組みをつなぐリレートーク

修学旅行や授業での被爆体験の継承 (中学校の先生)

福島のこと・マーシャルにいったこと・子ども若者フォーラムに取り組んだこと (大学生)

被爆者運動資料の整理作業に参加して (大学生)

被爆者聞き取り冊子普及を通じて (千葉県被爆者聞き取り実行委員会)

高校生 (高校生平和ゼミナール)

被爆者と世界をまわって (仮題) (ピースボートに乗船した若者)

NPT再検討会議に初めて被爆二世として参加して (東京被爆二世の会)

被爆者ひとりひとりの人生と出会う (the pigeon voices)

タイトル未定 (ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐネットワーク)

■ミニコンサート (コカリナ演奏 黒坂黒太郎 (正文)、歌 矢口周美)

■会場発言 (発言時間は3分、時間厳守でお願いします)

(2) 「ヒロシマ・ナガサキを語り受け継ぐつどい」への参加、宣伝にご協力ください

昨年の12/13「つどい」は司会やリレートークなどで若い世代の受け継ぎ手が活躍し、継承のかたちが見えたこと好評でした。今年も被爆者、シニア世代をはじめ、若い受けつぎ手の皆さんに去年以上に参加してもらえよう働きかけていきます。みなさんもお誘いあわせの上、ご参加ください。東京近郊の正会員、賛助会員のみなさまにはチラシを2枚入れました。

同封の案内チラシは継承ブログからもダウンロードいただけます。この「つどい」リレートークの紹介などは継承する会のwebサイト、継承ブログ、Facebookでも順次、ご案内していきます。ぜひFacebookの案内記事を拡散するなど宣伝にもご協力ください。

Ⅲ. 被爆者運動に学び合う学習懇談会のお知らせ

日本被団協と実行委員会が主催した10.17被爆70年のつどい「広島・長崎はなんだったのか—今を戦前にしないために」では、被爆者たちが自ら立ち上がって会をつくり、原爆がもたらした苦しみ・被害を明らかにして、国に要求し世界に訴えつづけてきた姿が参加者の感動を呼びました。私たちがこの国に民主主義と平和を実現したいと願ういま、被

爆者たちの運動の足跡から学べることは少なくありません。

ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会では、来年日本被団協結成60周年に向けて、被爆者運動に学び合う学習懇談会をシリーズで開催していきます。その第1回目は11月14日(土)、立教大学池袋キャンパスで「原爆被害の実相を追究する―被爆者・調査・運動―」をテーマに開くことになりました。問題提起は、濱谷正晴氏(一橋大学名誉教授・社会調査論)にお願いします。日本被団協の結成当初から、各地でまた全国で、原爆が人間にもたらした被害は何だったのかを解明し、要求の根拠ともしてきた被爆者たちのさまざまな調査活動の経験から、いっしょに学び合ってみませんか。(詳細、申し込みについては、同封チラシをご参照ください。)

IV. 《紹介》 ご寄贈いただいた図書から

- 1) 石川県原爆被災者友の会『ヒロシマ・ナガサキ あの日、あの時から そして、今』
(頒価：500円、送料実費)

被爆70周年慰霊事業の一環として、県内会員30名の原爆症認定申請書の綴りから抜粋・構成した記録をまとめ出版。手帳所持者がわずか140名ほどしかない石川県では、集団訴訟運動で提訴した人は一人もいませんが、原爆で健康を破壊され人生を狂わされた被爆者が「このまま黙って死ぬわけにはいかない」と37人が原爆症の認定を申請、18人が認定(19人が却下)されました。各自の申請書にみるプロフィール(被爆時の状況、既往歴)から、原爆の非人道性ととも認定制度の矛盾もまた浮かび上がってくるようです。

- 2) 長曾我部久著『世界的視点での「脱原発論」 日本のとるべき道』(トライ出版、定価：1,500円+税)

原発投下の真実／被爆者運動／「脱原発」をどう考えるか／日本のとるべき道、の4部から構成。9歳のとき広島原爆で父を喪った著者は、母と共に父を捜しに入市して被爆。平成16年から熊本県被団協会長。福島原発事故の責任国である日本の原子力政策は、世界への謝罪、事故原因の明確化・再発防止策、自己責任の明確化、原発技術に対する信頼感の回復のどれにおいても満足できないと批判。そのうえで、周辺国を含め世界の原発建設が止められない以上、日本は単純な「脱原発」ではなく、安全管理のための人材を送り出すなど、先進技術を生かし世界の安全への責任を果たすべきだと提言しています。

V. 2015年度会費納入のお願い

会費の振込用紙を同封させていただきました。すでにお納めいただいているみなさまには振込用紙は入っておりません。ご送金と前後した場合はお許しください。領収証が必要な方はご連絡下さい。領収証をお送りいたします。よろしく願いいたします。